まちづくりミーティング開催結果概要

開催テーマ **繊維産地桐生の活性化**

日時：令和4年3月23日（水）午後7時から8時10分
場所：桐生市保健福祉会館　5階　503会議室

参加者

ふふふ代表　和崎　拓人
株式会社　笠盛　トリプル・オゥ事業部マネージャー　片倉　洋一
株式会社　笠盛　広報部　野村　文子
桐染代表　平本　友里
有限会社　井清織物　代表取締役　井上　義浩
桐生整染商事　株式会社　川上　由綺

桐生市長　荒木　恵司

報道機関　2名

内　容

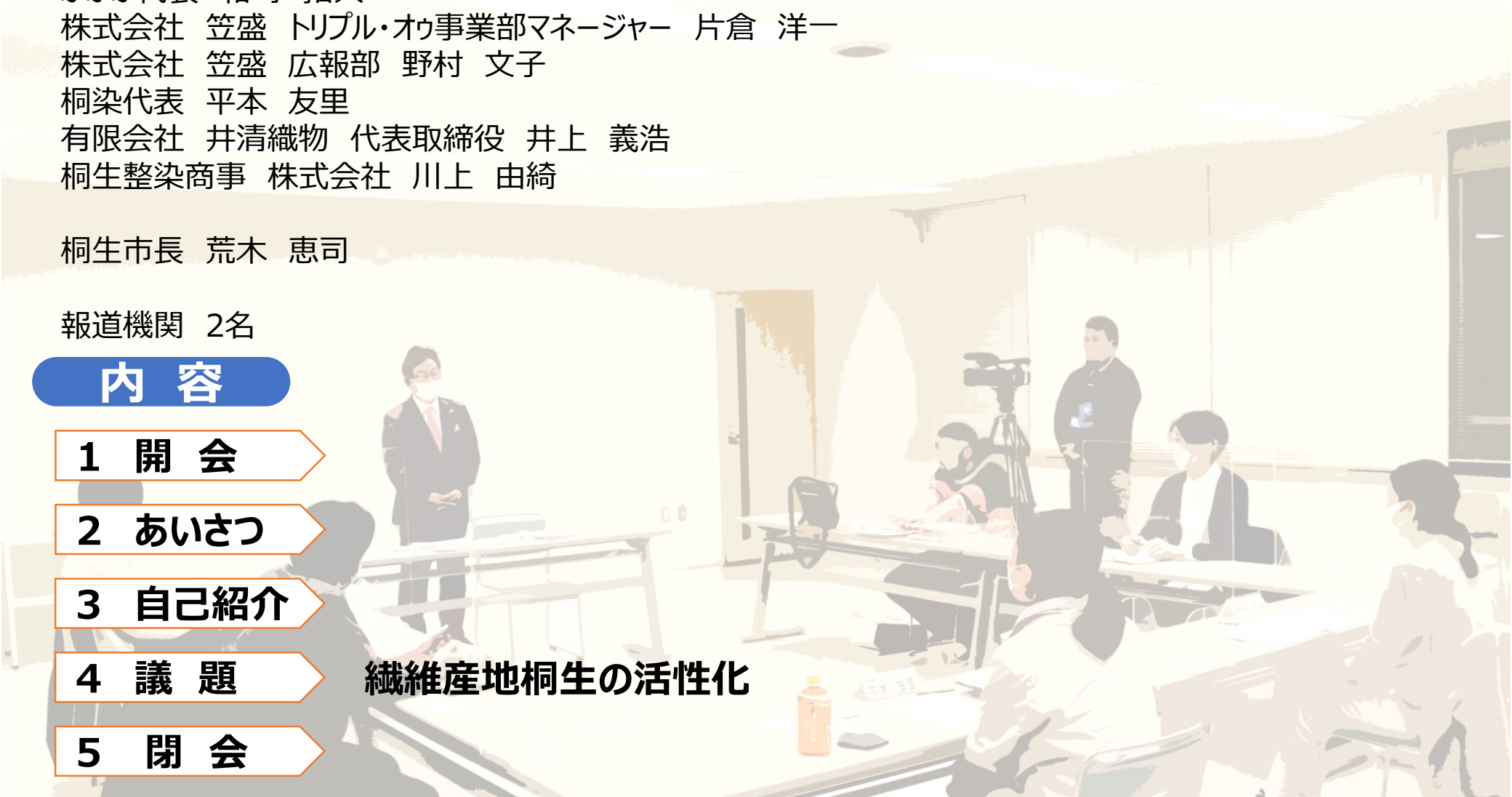
1　開　会

2　あいさつ

3　自己紹介

4　議　題　　繊維産地桐生の活性化

5　閉　会



４　議　題　繊維産地桐生の活性化

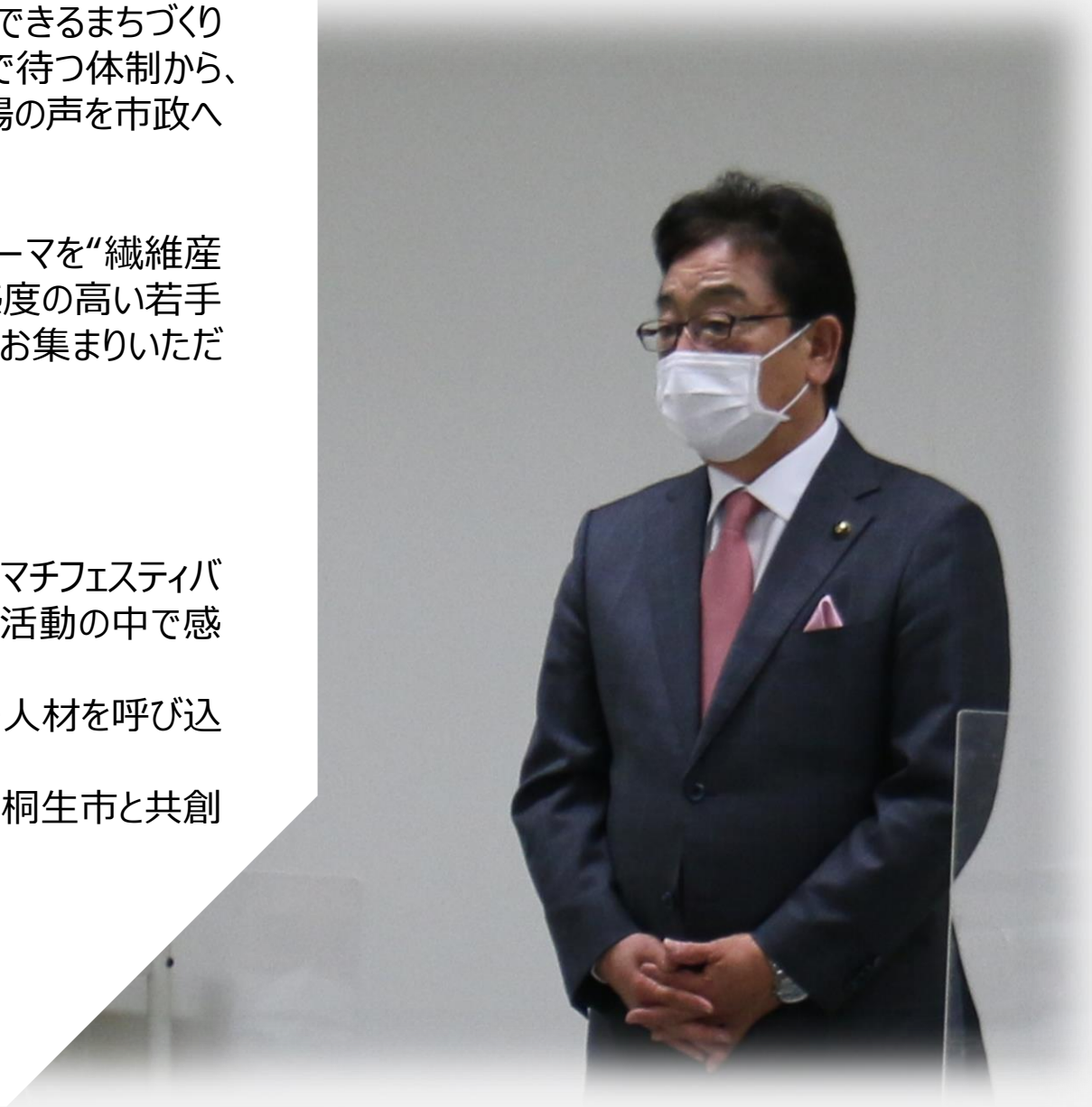
私は市長就任来、「共感」、「共創」が実感できるまちづくりを進めるため、『現場に神宿る』精神で、役所で待つ体制から、どんどん現場へ出向く行政を推進しており、現場の声を市政へと反映すべく取り組んでいる。

本日の「まちづくりミーティング」では、開催テーマを“繊維産地桐生の活性化” とし、繊維産業に携わる感度の高い若手人材の皆様と意見交換したいと考え、皆様にお集まりいただいた。

資料の「意見交換のポイント」にあるとおり、

- 山梨県富士吉田市で開催された「ハタオリマチフェスティバル」等への参加を通じて感じたことや普段の活動の中で感じていること
- 繊維産業（商品やしごと）に興味を持つ人材を呼び込むために桐生市と共創したいこと
- その他、繊維産地桐生の活性化のために桐生市と共創したいこと

について、意見交換をお願いしたい。

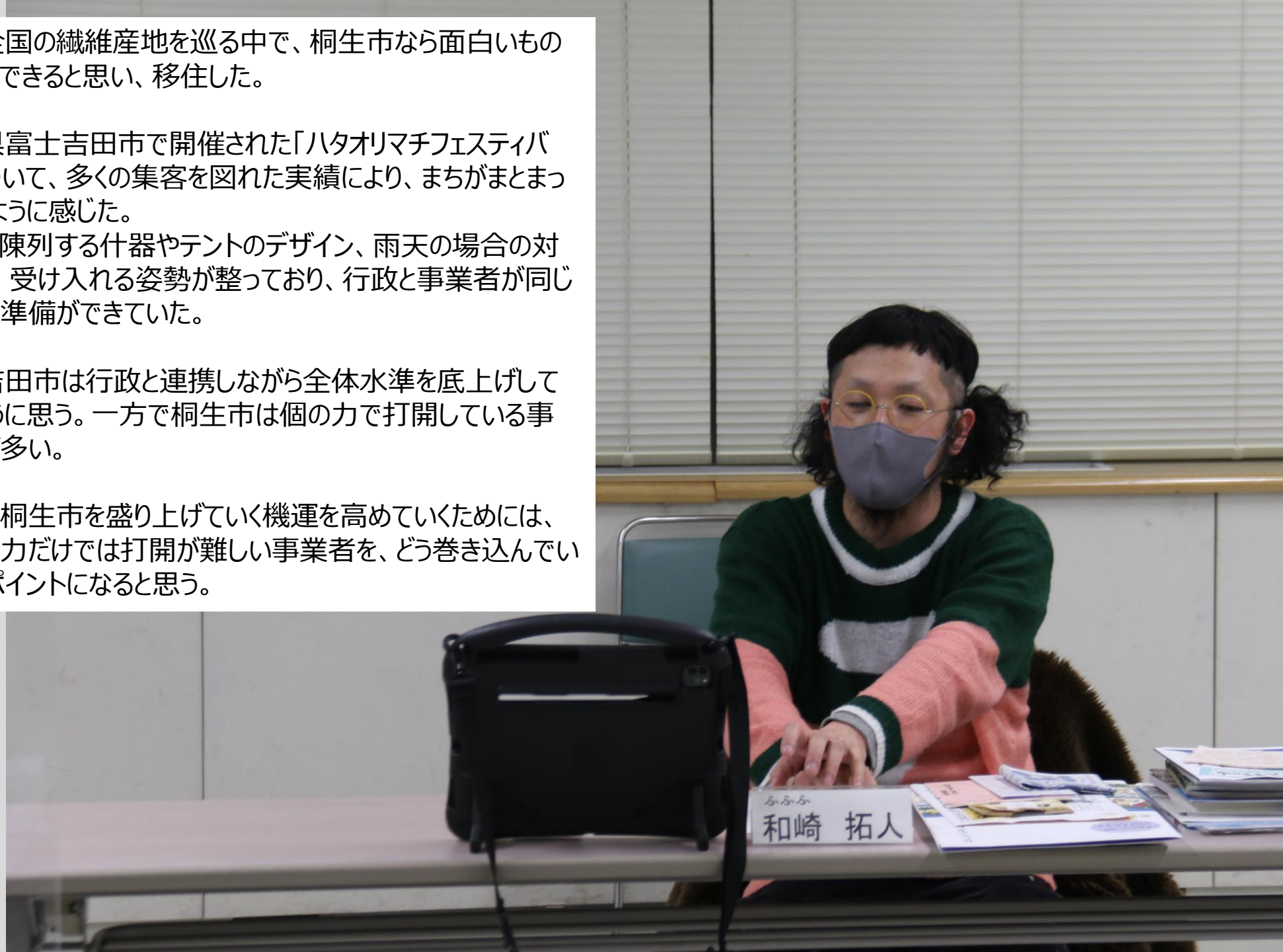


日本全国の繊維産地を巡る中で、桐生市なら面白いものづくりができると思い、移住した。

山梨県富士吉田市で開催された「ハタオリマチフェスティバル」について、多くの集客を図れた実績により、まちがまとまっているように感じた。
商品を陳列する什器やテントのデザイン、雨天の場合の対応など、受け入れる姿勢が整っており、行政と事業者が同じ目線で準備ができていた。

富士吉田市は行政と連携しながら全体水準を底上げしているように思う。一方で桐生市は個の力で打開している事業者が多い。

繊維で桐生市を盛り上げていく機運を高めていくためには、自社の力だけでは打開が難しい事業者を、どう巻き込んでいくかはポイントになると思う。



桐生市には規模の小さな事業者が集まっていて、それぞれに得意な技を持っており、そこに魅力を感じて移住した。
新しい刺繍を通した可能性にチャレンジしながら、桐生市にもっと人を呼べる活動をしたいと考えている。

富士吉田市の事業者もOEMから自社ブランドを立ち上げるなど、桐生市の抱える課題と似ていた。課題解決に対するノウハウをざっくばらんに共有できる関係性は重要であり、今般の産地間交流は大きな収穫になったと考えている。
産地を超えた交流を通し、社員に気づきを与え、働きがいや誇りをもって仕事ができるようにしたい。

富士吉田市では、市と事業者の中間にキーパーソンがおり、連携を進める重要な役割を担っていた。
全く同じことは桐生市ではできないと思うが、桐生らしい関わり方を創り出していくと良いと思う。

桐生の繊維産業が世界のファッションを動かしていることが、生活の中で感じられないように思う。

B to Bのプロフェッショナル向けなまちでありながら、手芸好きな人や生活する人、桐生に関係する人、全ての人に、桐生市が繊維のまちであることを感じられるような仕掛けが重要である。

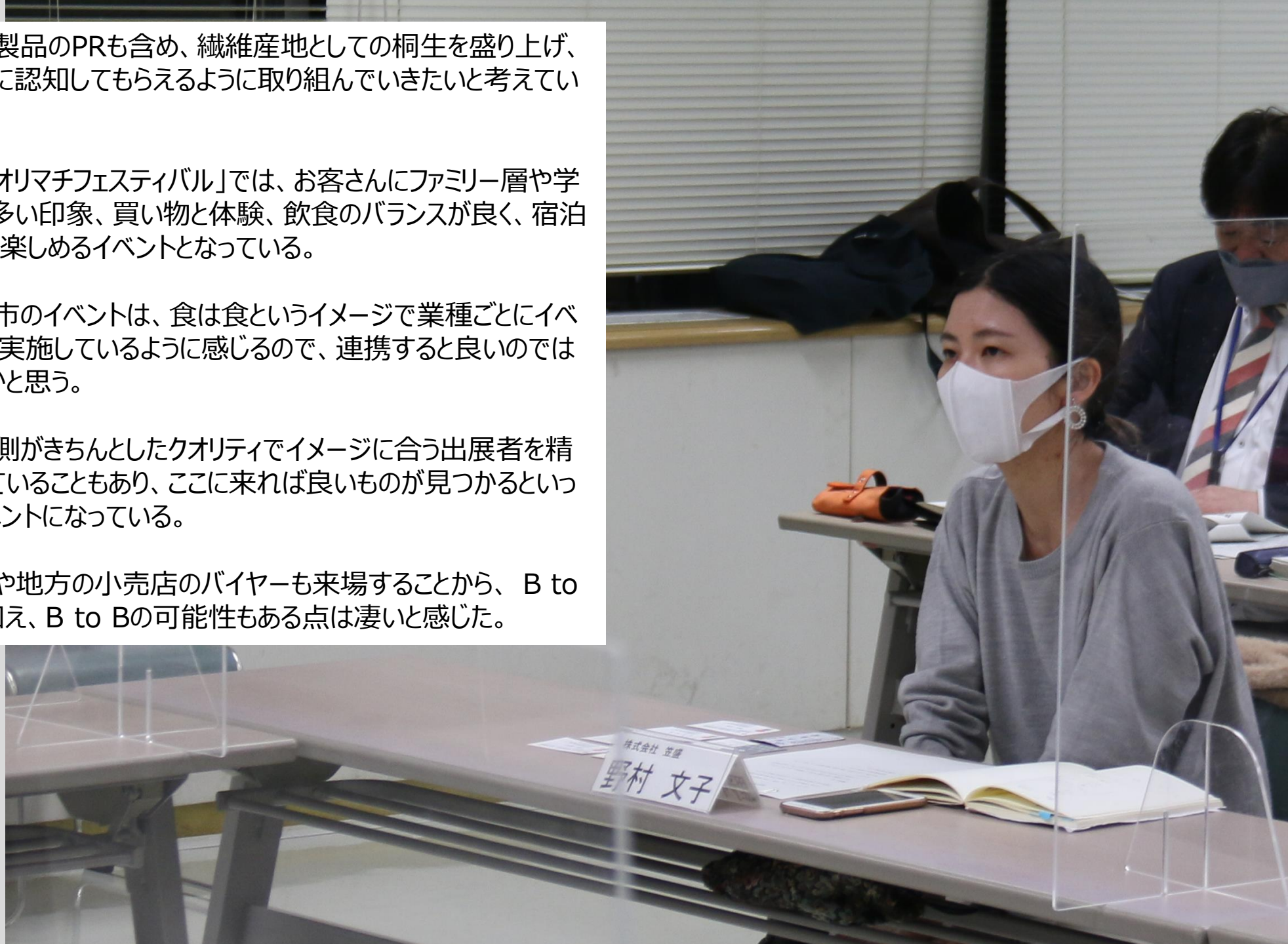
自社製品のPRも含め、繊維産地としての桐生を盛り上げ、世界に認知してもらえるように取り組んでいきたいと考えている。

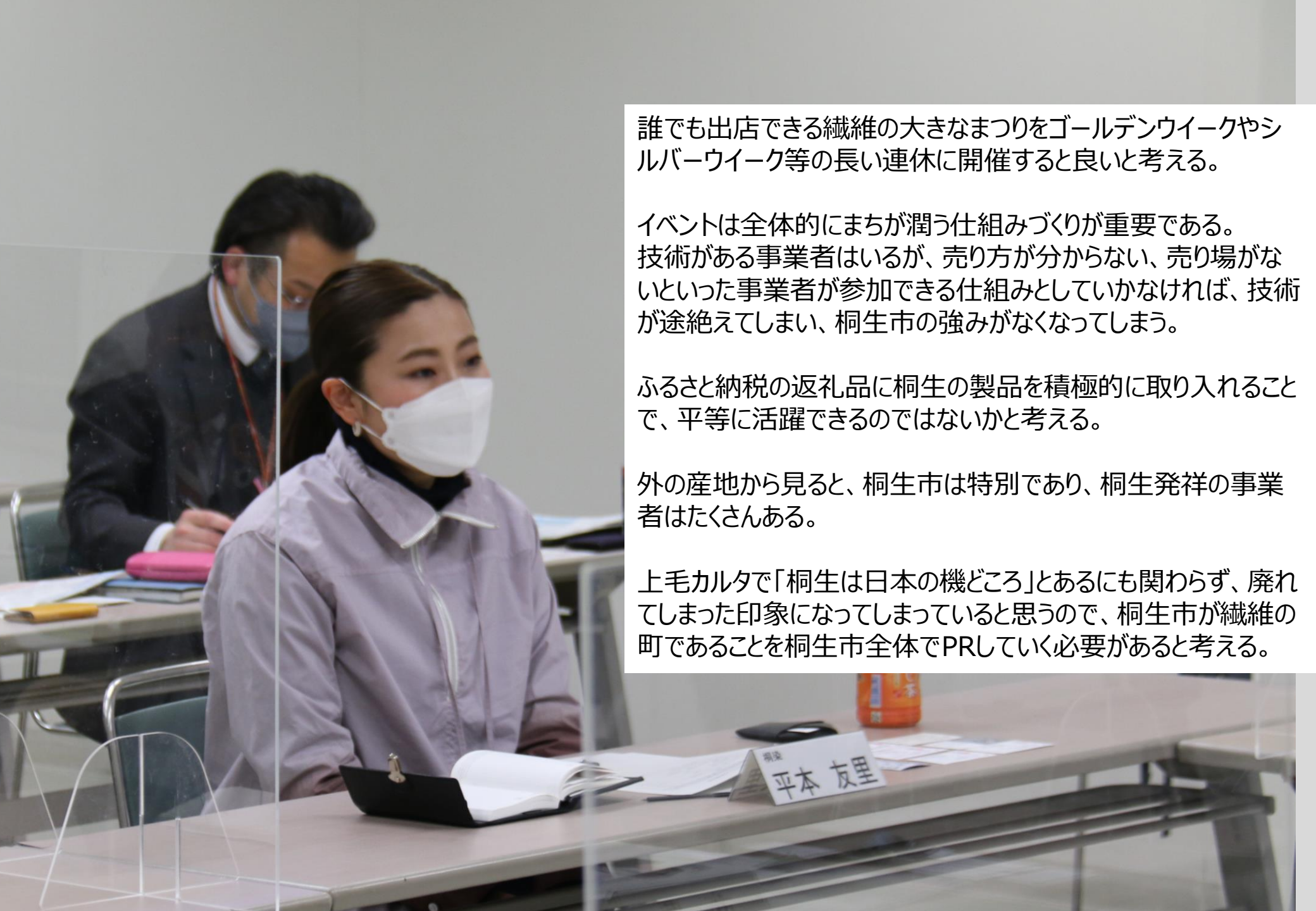
「ハタオリマチフェスティバル」では、お客さんにファミリー層や学生が多い印象、買い物と体験、飲食のバランスが良く、宿泊しても楽しめるイベントとなっている。

桐生市のイベントは、食は食というイメージで業種ごとにイベントを実施しているように感じるので、連携すると良いのではないかと思う。

運営側がきちんとしたクオリティでイメージに合う出展者を精査していることもあり、ここに来れば良いものが見つかるといったイベントになっている。

県外や地方の小売店のバイヤーも来場することから、 B to Cに加え、B to Bの可能性もある点は凄いと感じた。





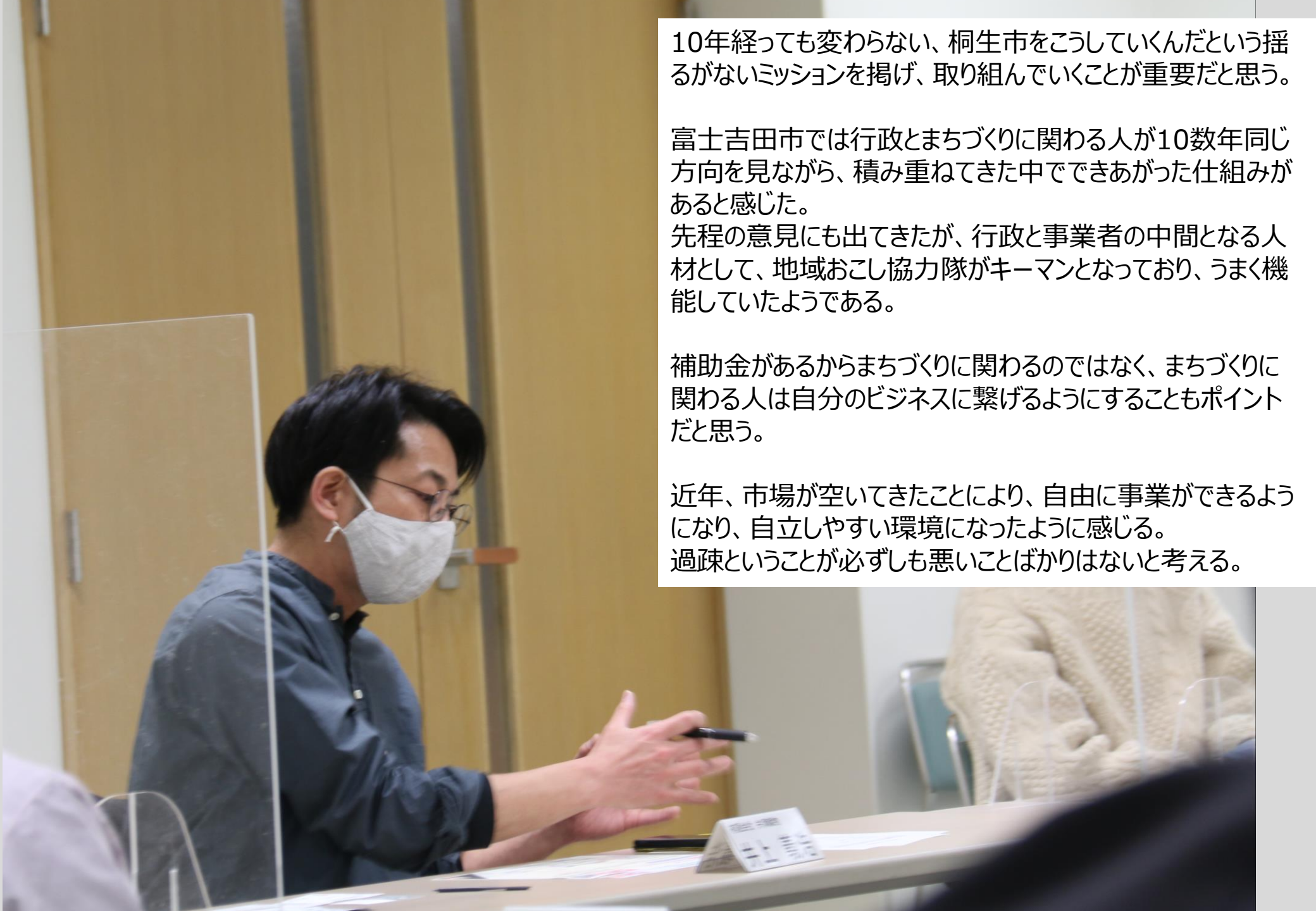
誰でも出店できる繊維の大きなまつりをゴールデンウイークやシルバーウイーク等の長い連休に開催すると良いと考える。

イベントは全体的にまちが潤う仕組みづくりが重要である。
技術がある事業者はいるが、売り方が分からない、売り場がないといった事業者が参加できる仕組みとしていかなければ、技術が途絶えてしまい、桐生市の強みがなくなってしまう。

ふるさと納税の返礼品に桐生の製品を積極的に取り入れることで、平等に活躍できるのではないかと考える。

外の産地から見ると、桐生市は特別であり、桐生発祥の事業者はたくさんある。

上毛カルタで「桐生は日本の機どころ」とあるにも関わらず、廃れてしまった印象になってしまっていると思うので、桐生市が繊維の町であることを桐生市全体でPRしていく必要があると考える。

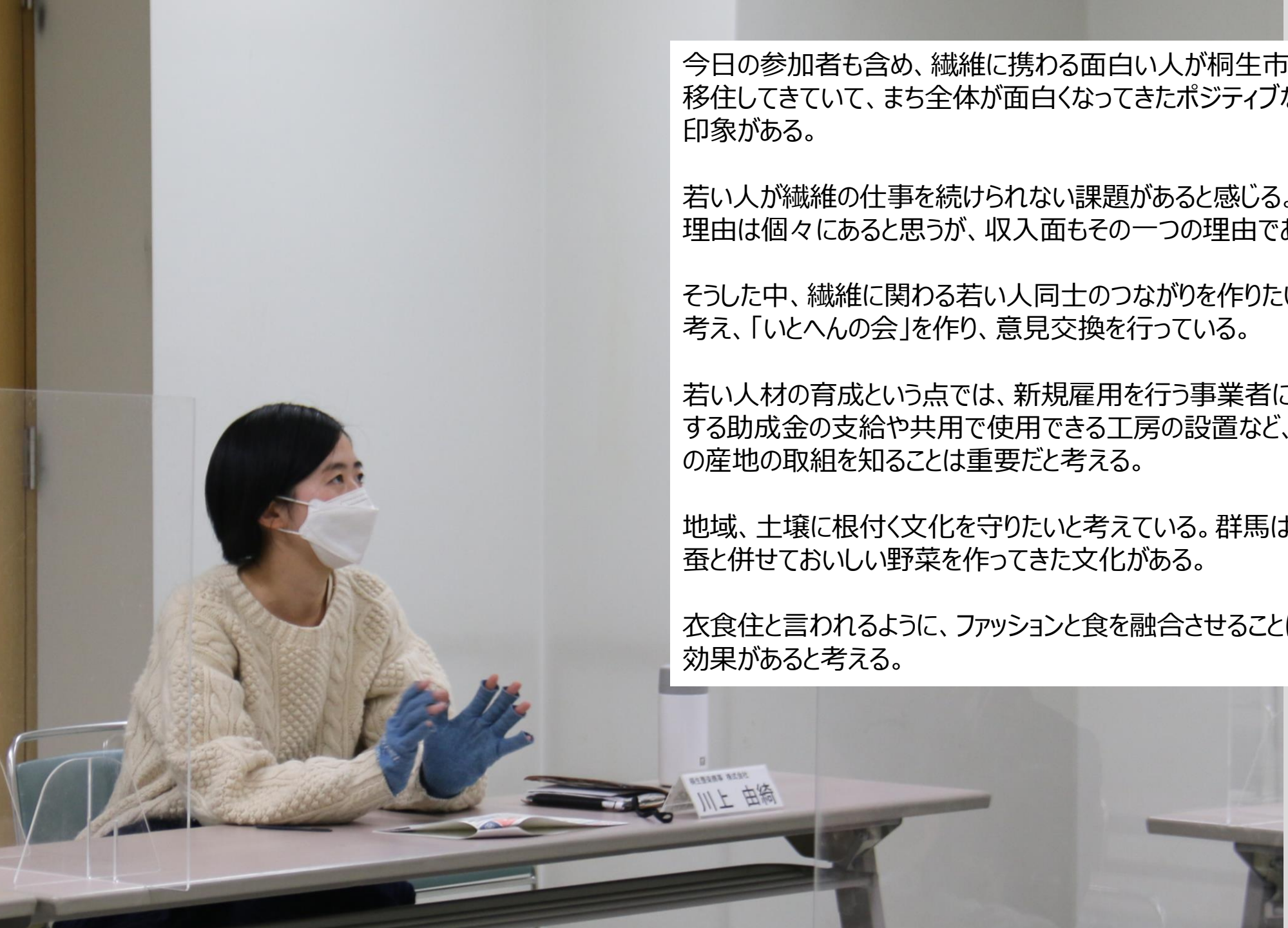


10年経っても変わらない、桐生市をこうしていくんだという揺るがないミッションを掲げ、取り組んでいくことが重要だと思う。

富士吉田市では行政とまちづくりに関わる人が10数年同じ方向を見ながら、積み重ねてきた中でできあがった仕組みがあると感じた。
先程の意見にも出てきたが、行政と事業者の中間となる人材として、地域おこし協力隊がキーマンとなっており、うまく機能していたようである。

補助金があるからまちづくりに関わるのではなく、まちづくりに関わる人は自分のビジネスに繋げるようにすることもポイントだと思う。

近年、市場が空いてきたことにより、自由に事業ができるようになり、自立しやすい環境になったように感じる。
過疎ということが必ずしも悪いことばかりはないと考える。



今日の参加者も含め、繊維に携わる面白い人が桐生市に移住してきていて、まち全体が面白くなってきたポジティブな印象がある。

若い人が繊維の仕事を続けられない課題があると感じる。理由は個々にあると思うが、収入面もその一つの理由である。

そうした中、繊維に関わる若い人同士のつながりを作りたいと考え、「いとへんの会」を作り、意見交換を行っている。

若い人材の育成という点では、新規雇用を行う事業者に対する助成金の支給や共用で使用できる工房の設置など、他の産地の取組を知ることは重要だと考える。

地域、土壌に根付く文化を守りたいと考えている。群馬は養蚕と併せておいしい野菜を作ってきた文化がある。

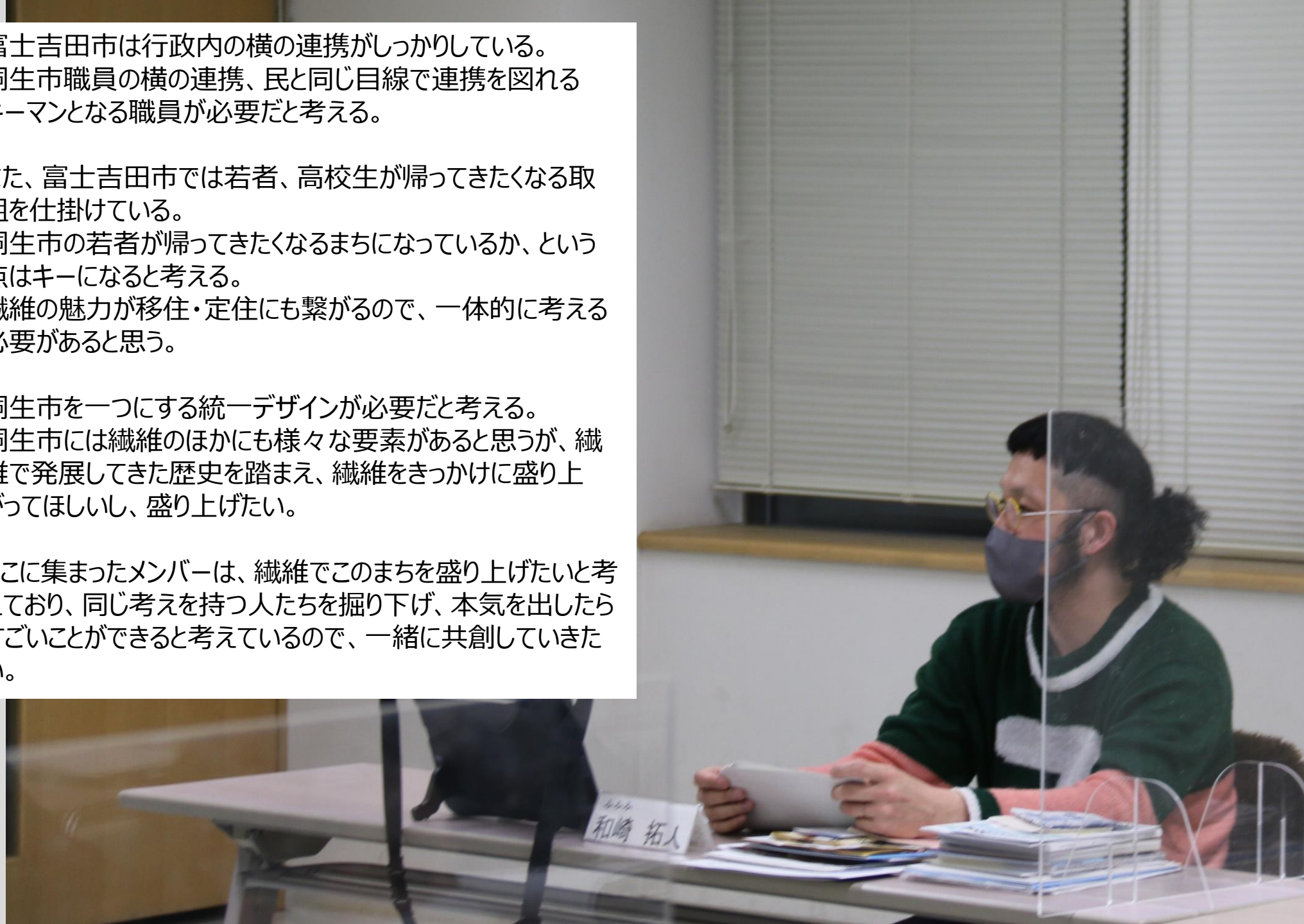
衣食住と言われるように、ファッションと食を融合させることは効果があると考える。

富士吉田市は行政内の横の連携がしっかりしている。
桐生市職員の横の連携、民と同じ目線で連携を図れるキーマンとなる職員が必要だと考える。

また、富士吉田市では若者、高校生が帰ってきたくなる取組を仕掛けている。
桐生市の若者が帰ってきたくなるまちになっているか、という点はキーになると考える。
繊維の魅力が移住・定住にも繋がるので、一体的に考える必要があると思う。

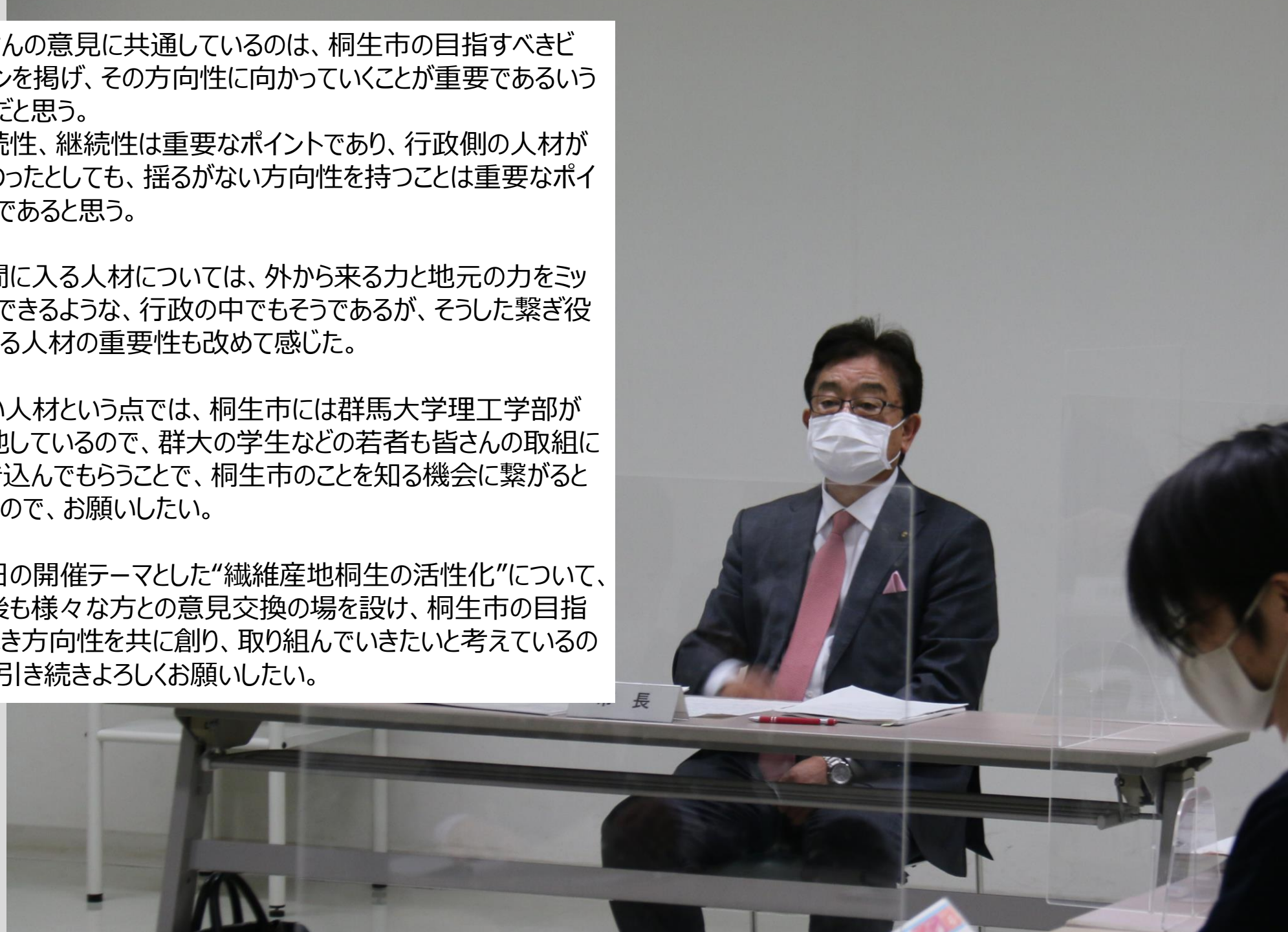
桐生市を一つにする統一デザインが必要だと考える。
桐生市には繊維のほかにも様々な要素があると思うが、繊維で発展してきた歴史を踏まえ、繊維をきっかけに盛り上がってほしいし、盛り上げたい。

ここに集まったメンバーは、繊維でこのまちを盛り上げたいと考えており、同じ考えを持つ人たちを掘り下げ、本気を出したらすごいことができると考えているので、一緒に共創していきたい。



皆さんの意見に共通しているのは、桐生市の目指すべきビジョンを掲げ、その方向性に向かっていくことが重要であるということだと思う。
連続性、継続性は重要なポイントであり、行政側の人材が変わったとしても、揺るがない方向性を持つことは重要なポイントであると思う。

中間に入る人材については、外から来る力と地元の力をミックスできるような、行政の中でもそうであるが、そうした繋ぎ役になる人材の重要性も改めて感じた。

若い人材という点では、桐生市には群馬大学理工学部が立地しているので、群大の学生などの若者も皆さんの取組に巻き込んでもらうことで、桐生市のことを知る機会に繋がると思うので、お願いしたい。

本日の開催テーマとした“繊維産地桐生の活性化”について、今後も様々な方との意見交換の場を設け、桐生市の目指すべき方向性を共に創り、取り組んでいきたいと考えているので、引き続きよろしくお願いしたい。